

古書のたのしみ（令和四年十一月）

土屋 博

一「山陽先生 真蹟詩帖」

（沈香書閣蔵、明治十一年初版、廿七丁）

古書價格二千八百圓也。和綴。頼山陽（一七八一一年生れ、一八三二年歿）の筆使ひ、朱印を見事に再現す。當時の我が國の印刷技術の高さを證明する、永く愛蔵すべき小冊子と覺ゆ。三度目の購入なれど、既所有のもの（十一年再販及び十二年版）に比して保存状態遙かに良し。

二「國史紀要 卷中、卷下」東京府平民岡本監輔編

（出版者岐阜縣平民三浦源助、成美堂支店、發賣所代理店石井鉤三郎、明治二十一年三版）

古書價格各二百圓也。從明治二十年二月十六日至明治二十五年二月十五日文部省檢定濟小學校教科用書とあり。編者岡本監輔（一八三九年生れ、一九〇四年歿）は、阿波出身の北海道開拓判官、東大豫備門御用掛、一高講師、臺灣總督府國語學科教授。卷中の見出しは、諸源滅平氏、源氏開霸府、北條滅源氏、承久之變、陪臣專權、元寇之變、後醍醐平鎌倉、尊氏之反、後醍醐幸吉野、室町執權、武臣割據、信長鎮京畿、秀吉制服群雄、秀吉征朝鮮、關原之戰。卷下の見出しは、家康定霸業、島原之亂、上下恬熙（やはらぐ）、冽藩紀事、外交訂盟、大政維新、西南之亂、征討臺灣、朝鮮之變。小學生向けにも拘らず文語文の格調高く、知的刺激に富む。鎌倉殿あたりの表現ぶり、以下の如し。「頼家疾む。政子時政と議し關西三十八國の地頭を割て千幡に豫^{あた}へ關東二十八國の地頭及總追捕使を一幡に傳んとす。頼家之を聞き外舅比企能員と謀り時政を滅さんとす。時政能員一幡を殺し頼家を伊豆修善寺に幽し千幡を立つ。是を朝と爲す。」云々と。

三「にほんれきし教科書 中卷、下卷」文學博士重野安繹、星野恒校閱、文學士高津鋏三郎、三上參次、磯田良編纂

（大日本圖書、明治二十七年刊、八六+九七丁、定價金參拾錢）

古書價格各五百圓也。「にほんれきし教科書」は、明治二十六年に米國シカゴにてコロネブス世界博覽會の開催に合せ文部省の用意したる英文日本歴史の元をなすものにして、中學用教科書として手を加へたるものなり。三上參次（一八六五年生れ、一九三九年歿）は後に東京帝大教授。高津も後に帝大助教授に。磯田は後に東京講師教授に。中卷の目次を

見るに、第二編武家政權を私せし時代、とありて、第一章鎌倉幕府時代、第二章建武中興より南北朝の終りに至る、第三章室町幕府時代、第四章織田豊臣時代。源朝のくだりより、「千幡將軍の職を繼げり、是を朝とす、時に年十歳、時政の家に養はれき。元久元年畠山重忠の子重保等朝の妻を迎へんが爲に上洛せり。重保等一日京都の守護平賀朝雅の家に招かれ宴席に於て大に朝雅を罵りき。重忠朝雅共に時政の女婿なれども朝雅は時政の後妻牧氏の女を娶れるを以て時政は朝雅を愛しやゝ重忠を疎んじたり。」云々。また、下巻の目次を見るに、第五章江戸幕府時代、第三編帝政復古及び立憲政體の時代、とあり。日清戦争以前までの歴史描かる。

四「維新三傑」北村紫山著

（博文館、明治廿九年八版、一七六頁、定價金拾二錢）

古書價格千圓也。初版は明治廿四年。南洲については「一箇の木強漢なり。赤手單刀維新の風雲を捲き、掀天翻地の畧を運らし搏虎屠龍の手腕を弄したるは此の木強漢なり」と。「木強」とは、きすぐ、武骨なること。大久保については、「氣象沈毅風骨巍然、一斷一決石を裂き、鐵を截ち天下の責を一身に負て避けず隻手國家の重きに任じて疑はざるものは、明治政府一甲東あるのみ」と。木戸については、「文は以て國を經し民に利するに足る。智は以て亂を排し紛を解くに足る。而して思慮周緻、小處も滲漏せず、才機練達大事も糊塗せざるは、是れ松菊獨壇の能なり」と。明治期の少年向け文章は、文語的表現の寶庫なり。

五「新編紫史 一名通俗源氏物語 卷一より卷十まで 全十冊」本居豊穎閱、増田于信譯（誠之堂、明治三十七年刊、全部正價金六圓）

古書價格全卷揃ひ千百圓の掘り出し物なり。二冊の端本のみ所有せし處、幸ひにも全卷揃ひを東京愛書會にて見附けたれば直ちに購入す。増田于信（文久二年生れ）は、國文學者。（七つの子、十五夜お月さんの作曲家本居長世の父。）凡例によらば、「この書の主意、源氏物語をして廣く世人に讀得さしむるにあり。故に古文を通譯して今文となす。されど原書の事文意などは寸毫も増損せず。」と。桐壺の冒頭は、「何の帝の御時にかありけん、女御更衣ども數多伺候ひける中にいと尊き身分にはあらねど人より勝れて時めきし一人の更衣あり」と云ふ具合。

六「新註評釋 小學大全」棚橋絢子評釋

（大正書院、大正二年刊、正價金八拾五錢、二七一頁）

古書價格七百圓也。棚橋絢子（一八三九年生れ、一九三九年百一歳にて歿）は、大坂の酒造業者の長女、十九歳にて盲目の漢學者棚橋松村と結婚。明治元年尾張に私塾を開き、その後東京高等女學校長・東京技藝學校長。緒言に曰く、「小學は宋の朱晦庵の纂輯する所なり。其序に曰く、小學にして人に教ふるに灑掃應對進退の節、親を愛し長を敬ひ師を隆び友に親むの道を以てす。皆修身齋家治國平天下の本たる所以にして必ず其をして之を幼稚の時に講習せしめ、其習、智と長じ化となりて扞格（ふせぎはばむ）勝へざるの患なからしめんと欲す」と。

七「先哲遺言」信濃教育會編

（信濃毎日新聞、昭和五年刊、定價金五拾五錢、二二八頁）

古書價格百圓也。冒頭に掲げられたるは五箇條の御誓文、「廣く會議を興し萬機公論に決すべし」。次いで杉浦重剛「倫理書」、橋本左内「啓發錄」、吉田松陰「士規七則」、山鹿素行「配所殘筆」、更に「日暮硯」、「南洲翁遺訓」、佐藤一齋「言志錄鈔」、蕃山「壁書」と續く。當時の教育者の真摯なる姿勢、價值觀の一端をば窺ふことを得。

八「生徒文集」（自昭和十二年卒業生至昭和十八年卒業生）

（陸軍豫科士官學校、昭和十九年刊）

古書價格千百圓也。たとへば、萩原兼則（昭和十二年卒業生）の作文、「卒業式に列して」を読むに、「去る六月二十九日、畏くも 天皇陛下 御觀臨の下に本科第四十八期生卒業式舉行せられ、我等豫科生徒隊は、特に玉座近くに在りて、此の盛儀を拜觀するの光榮に浴したり」云々とあり、天皇も陸士の行事を大事にせられたること改めて感ず。中島勉（昭和十七年七月卒業生）の作文、「對米英開戰に當りて」には、「思ふに、日米會談は既に數箇月の久しきに亙り、我が事理を盡くせる提案に對して彼は更に誠意を示さず、其の態度に憤慨に堪へざるものあり。皇國の此の舉に出でたる、誠に宜なりと謂ふべし。我は今日まで皇國の起つべき時を今か今かと期待し、寧ろもどかしき感無きにあらざりしも、翻つて思へば戰は我が好む所にあらず。爲し得る限り、平和の裡に事を解決せんとす。兵を用ふるは愈々最後の手段なり。されば事此に至るまで、あらゆる手段を講じて平和解決に努力せしなり。然るに米國の固陋頑迷なる、我が意を了解せず、我が慇懃を以て却つて我を侮り、更に不遜なる態度に出づ。斯くては我が努力も到底其の效なし。茲に謙讓の溫言は、膺懲の刃となりて下りぬ」とあり、文語表現力の高さを改めて感ぜしむ。

九「源氏物語湖月抄 上中下」

（講談社學術文庫、昭和六十二年三刷、定價各二千圓、首卷二三四頁、桐壺より明石まで六九〇頁、濔標より柏木まで九九七頁、横笛より夢浮橋まで一〇三八頁）

古書價格五千圓也。秋山虔東大教授によらば、本書は「源氏味讀のための理想的注釋書」なり。主語補はれ、參考書として最適なるものと言ふべし。與謝野晶子もこれを基に現代語譯作業をしたりとぞ。いはばバイブルの如きもの。惜しむらくは、縮刷版のため、字の小さきこと、老人にはやや辛き面あり。北村季吟（一六二五年生れ、一七〇五年歿）は江戸時代前期の歌人。門人に松尾芭蕉あり。

十「十帖源氏 上下」野々口立圃自筆版下本複製

（古典文庫、平成元年刊、非賣品、四一四・四九四頁）

古書價格四百圓也。「十帖源氏」は一六六一年に成立したる源氏物語の繪入り梗概書なり。俳人野々口立圃（^{りふほ}一五九五年京都生れ、一六六九年歿）の平易に俗譯したる繪入り本にて、立圃自身による挿繪添へらる。

十一「近代日本語と文語文 今なお息づく美しいことば」三浦勝也著

（勉強出版、平成二十六年刊、定價二千五百圓＋税、本文二六五頁）

古書價格千四百圓也。著者は昭和二十年生れ、早稻田大學文學部卒、都立工業高等專門學校名譽教授。明治四十年頃「文章世界」の行ひたる「文界十傑」といふ文筆家人氣投票によらば、一位徳富蘇峰（一八六三年生れ、一九五七年歿）、二位三宅雪嶺（一八六〇年生れ、一九四五年歿）なりし由。兩氏著作の古書蒐集に永年盡力したる小生としてみれば、合點のゆく處なり。

（令和四年一月八日受附）